

日本と東アジアの〈仏伝文学〉

小 峯 和 明

I 〈仏伝文学〉とは

こんにちは。ただいま過分なご紹介をいただきました小峯和明です。

私の研究の出発点は『今昔物語集』でして、『今昔』は大変壮大な世界を築いていますので、研究する側も大きくならなくてはいけないと、師匠によく言われました。『今昔物語集』は、天竺のお釈迦さんの伝記から始まり、「仏とは何か」を追及する過程から「人間とは何か」という問題に踏み込んで広がっていった、と思われまます。

ある程度研究をまとめてからは『今昔物語集』から離れたかと思いい、いろんなことをやっているうちに、やっぱり本家のお釈迦さんへ戻ってくると思いますか、ブツダという存在に、あらためて関心が高まってきて、元に戻って来ているような感じですか。現在は釈迦の伝記、「仏伝」といいう方をしますけれども、この〈仏伝文学〉を中心に研究しているところです。

最近では日本ばかりでなく、中国と朝鮮半島と、それからベトナムも加えて、あと沖縄、琉球も前近代までは日本と違う歴史文化を歩んできたので、沖縄も視野に入れるようにしています。先ほど堀川さんが話された蕭湘八景も、実は琉球にも事例がたくさんありますし、朝鮮やベトナムにもあります。そのような東アジアの漢字・漢文文化圏全体を対象にいろいろ見るようになったところでは、その際、〈仏伝文学〉は絶好の対象になるので、もっぱら釈迦の伝記をやっているところで、今日はその一端をお話しできればと思います。

資料がまとまらないまま、やっているうちにどんどん増えまして二十ページになりましたが、これは参考までにご覧いただいて、内容はパワーポイントと対応しております。絵巻物などいろんな図版を入れているうちに際限がなくなり、直すたびにどんどん増えていって、このあとスライドが二百枚くらいになってしまったので、時間内に収まるか心配です。絵を見て楽しんでいただければと思います。

タイトルは、「日本と東アジアの〈仏伝文学〉」です。サブタイトルに、「古典と近代をつなぐ」とつけました。今の日本文学研究では、古典と近代とがはつきり分断されて別れてしまっているのです、そこを何とかつないでトータルに見て行く必要がある。〈仏伝文学〉は、その点で古典と現代をつなぐことが出来る一つの目安になるだろうと考えています。

〈仏伝文学〉と、カッコを付けてありますが、これは私の造語です。釈迦の生涯のいわゆる仏伝だけでなく、釈迦が生まれる前世の姿の説話、本生譚とかジャータカと言いますが、これがたくさんあります。それから、釈迦には阿難とか目連とか、十大弟子と言われるような弟子が大勢いますけれど、そうした弟子達をめぐるエピソードもいろいろあります。それから、釈迦が涅槃に入って荼毘に付されると、舍利が残りますね。寿司のご飯をシャリというのは、ここから来ているわけですけど、その舍利をめぐる霊験譚もあります。それらのものも含めて〈仏

伝文学」と言っているわけです。あるいは、天竺を舞台とした神話の〈天竺神話〉と言いますか、巨大な須弥山を舞台に阿修羅と帝釈天が戦うようなスペクタクルな話題も含めたいと考えています。

東アジアにおける〈仏伝文学〉の出発点は、漢訳の仏伝経典です。『過去現在因果経』をはじめ、様々な仏伝経典がありまして、大正新脩大藏経だと第三巻、第四巻の本縁部というところに主なものが入っています。そのあたりから始まって、個々の説話に切り出して再編集した説話集ができます。平安時代の『三宝絵』や『今昔物語集』がそうですね。そしてさらには、中世以降には一つの独立した物語へ成長していきます。人間の生と死を追求する物語の一大原点と言つて良いかと思えます。

特に東アジアの漢字漢文文化圏で言うると、〈漢〉から〈和〉へ、という流れがあります。これは日本だけではなくて、朝鮮だと漢字をハングルに変えるとか、ベトナムでは字喃（チュノム）という新たな文字を作つて漢字とまぜて文章を作るといった動きがあり、漢文からそれぞれの〈和〉へ、翻訳、翻案されていく流れの一環として、この〈仏伝文学〉もあるわけです。

〈仏伝文学〉の起点はたんに文字テキストだけではなく、これまた私の造語ですけれど、〈法会文芸〉というものがあります。仏教の仏事の儀礼である法会という場で〈仏伝文学〉が様々に語られ、享受され、再生してゆくという動きがあります。〈仏伝文学〉に関連が深い法会で言えば、釈迦の誕生を祝う仏生会とか灌仏会といわれるものや釈迦が涅槃に入ったのを賛嘆し遺徳を慕う涅槃会があります。そういう法会場で語られたり、歌われたり、絵解きされたりする様々な媒体や場があります。特に涅槃図などの絵画や造形が非常に大きい意味を持っています。

釈迦の生涯は「釈迦八相」という、その生涯を八段階に分けてみるのが一般的で、(A)のパターンでいえば、下天、託胎、出胎、出家、降魔、成道、転法輪、涅槃です。この分け方は、出胎までが三段階に別れていて、最初の方が

細かくなっています。一方の(B)のパターンは、中国の唐代の『釈迦如来成道記』から始まって朝鮮に受け継がれるもので、こちらの方がバランスがとれていると思えますが、兜率来儀相、毘藍降生相、四門遊觀相、逾城出家相、雪山修道相、樹下降魔相、鹿野轉法相、双林涅槃相という八段階になります。

おおざっぱに言えば、天上界から釈迦がこの世に降りて来て、北天竺のカピラ工国の王子として生まれる。成長してヤシユダラと結婚して、男子のラゴラが生まれますが、人生の苦悩にめざめて出家する。そして、苦行のはてに菩提樹の下で悟りを開き、教えを説くために布教活動をおこなない、最後は跋提河のほとりの沙羅双樹のもとで八十年の生涯を終える、というものです。

II 日本の〈仏伝文学〉・古代、中世

まず日本から見えていきますと、時代ごとに様々な〈仏伝文学〉が作られていますので、古代、中世、近世、近代、現代に分けて、時代ごとに概要を見ていきます。古代の仏伝というと、十二世紀頃までですが、最も古いのは八世紀、法隆寺の五重塔の内陣の中に釈迦の涅槃像が塑像で作られています。最近は網がかけられて見にくくなっています。涅槃や舍利の分配などの場面が、五重塔の柱の四方にそれぞれ配置されています。もう一つは、同じ法隆寺の玉虫厨子ですね。厨子の壁面に本生譚が描かれています。無常偈を知るために我が身を犠牲にしようとする雪山童子の話とか、飢えた虎に我が身を与える薩埵太子の「捨身飼虎」の話などで、敦煌の壁画など、様々な石窟にも描かれている、最も有名なシャータカです。説話でいうと、平安時代の『三宝絵』に独立した形で語られています。

あと奈良時代のもので、『絵因果経』という絵巻があります。絵巻の中でも最も古いもので、全部は残っていま

せんけれど、『過去現在因果経』という釈迦の伝記の経典を絵巻にしたものです。これは上の段に絵が来て、下の段に文が来るスタイルですね。これだと絵と文が一緒に見えるので読みやすいスタイルですけれど、絵のスペースが非常に限られてしまうので、これ以降の絵巻史ではこのスタイルは踏襲されません。後の時代では絵と詞書が交互に来るスタイルが一般化します。『絵因果経』は後世に横写されたものも残っています。

古代で最大かつ重要な〈仏伝文学〉が『今昔物語集』です。天竺部で百五十話を越える説話が集められ、漢字片仮名交じりの迫力ある文体で綴られています。部分的に日本の風景や食物に表現が変わっている例もあります。あと、後白河院が編纂した今様という当時流行していた歌謡集の『梁塵秘抄』にも、仏伝関連のうたがいろいろ入っています。

ついで中世を見ますと、独自の仏伝の物語が作られるようになっていきます。『教児伝』や『釈迦如来八相次第』という新たな〈仏伝文学〉がごく最近になって見つかっています。成立はだいたい十四世紀の南北朝期で、天台宗の系統です。臨濟宗の栄西作とされる『釈迦八相』もあります。これは偽書というか栄西仮託書ではないかと思えます。このように新しい〈仏伝文学〉が制作されていきますが、何とんでも中世の〈仏伝文学〉の代表作は、十五、十六世紀の『釈迦の本地』です。ジャンルでいうとお伽草子とか室町時代物語になります。仏教伝来から数世紀を経て日本型の〈仏伝文学〉が作られるようになったといえます。漢訳経典から始まって、だんだん仏教に習熟していく過程で、日本人の感性や嗜好に合わせて仏伝の物語が作り変えられていくわけです。その最初のピークがこの『釈迦の本地』だと言つていいでしょう。それに比べると、十二世紀の『今昔物語集』などは、だいぶ日本型になりつつあるけれども、まだまだ経典の縛りの範囲内にある過渡期の作という感じがします。

この『釈迦の本地』は、非常に良く読まれて、江戸時代には出版され、絵巻や絵本が作られたり、古浄瑠璃

という人形を使った語り物になったりして、読み継がれていきます。

中世においても一つ注目すべきは、坊さんたちが使った説教のテキストですね。それを「説草」と呼んでいます。神奈川県金沢文庫が金沢北条氏の菩提寺である称名寺の資料をたくさん収蔵していますが、その中から奈良の東大寺の尊勝院にいた、平安末期から鎌倉初期の弁暁という学僧の説草が大量に見つかりました。私はこの調査に関わっていて、去年ようやく翻刻本が出て責任を果たしましたが、これを見ますと、経典を踏まえつつもそこから離れた弁暁独特の語りが見られます。弁暁は、『平家物語』で有名な平家が奈良を攻めて東大寺を燃やしてしまった後、その東大寺を再建する時に活躍した学僧です。その弁暁が法会場で語った唱導といわれる説教の、鎌倉時代の生の資料が大量に出て来たわけですから、本当に貴重な資料だと思います。「説草」というのは写本の小冊子で、単純に紙を折ったんで二つ折りにし、折り目側を糊づけして製本するだけの簡便な装丁です。ですから剥がれやすいですし、虫喰いがひどくて、最初が欠けていたり最後が欠けていたりで、解読が本当に大変でした。それでも、鎌倉時代の現物が残っているわけですので、非常に貴重な資料といえます。自分がかかわったので、ちよつと本の宣伝をさせてもらいました(笑)。

各冊の表紙はタイトルとともにいろいろな書き込みがあります。坊さんが説教する時に、索引として使えるわけで、いろいろ使い回しされる便利なものだったでしょう。その中に、釈迦を中心に書かれた「釈尊往昔発心因縁」というタイトルのものがあり、釈迦の伝記が、こうした形で語られていたことが良く分かります。ついでにというと、玄奘三蔵の『大唐西域記』なども引用されています。

時間がないので、詳しくお話できませんが、たとえば釈迦が涅槃に入るのが近づいたということで、弟子たちはショックを受けるわけですね。それを見た釈迦が、「自分は何でもできるので涅槃をもう少し延ばそうか」と阿難に

もちかけたのですが、阿難が何も言わなかったため、予定どおりに釈迦は涅槃に入ってしまう。そこで、阿難は後から他の弟子たちから非難されたという話になっていまして、かなりくだけた会話体になっています。こういう生き語りの場が重要な意味を持っていたわけで、漢文の經典類を離れた自在な説話が生まれる源だったと言えるでしょう。

それから、野外で人形を使つた説教も行われていたようで、たとえば、一遍上人の伝記の絵巻『遊行上人縁起絵巻』の二画面に、京の五条の橋が描かれていて、右側にいる黒い顔の坊さんが一遍で弟子達一行と橋を渡っているシーンです。絵としては一遍に焦点があるわけですが、左側の橋のたもとで傘をかぶつたお坊さんが布をかぶせた台を前に説教しています。それを周りで聞いている人達は、袖で顔をおおつて泣いています。いわゆる人形勧進というものですが、その人形を見ると、台の右側に横たわっているのは明らかに釈迦であつて涅槃の場面です。周りを弟子たちが泣いて囲んでいる。一方、左側は鳥居があつて鬼たちが餅つきをやっているような格好です。これは地獄ですね。地獄で亡者たちを鬼が責めて、白に入れて餅つきのようにしている人形です。地獄と涅槃ですから、人間の死後の世界がテーマになっていたのでしょうか。それを聞いて人々が泣いているところにその語りの影響力がうかがえますね。このようにいろいろな形で釈迦の物語が語られていたことを、もっと重視していいと思います。

その一方で中世には掛幅図といわれる大画面に描かれた仏伝図が作られるようになります。写真にはニューヨークのメトロポリタン美術館にある室町時代のものあげました。八相図や涅槃図などもたくさん作られたでしょう。

中世を代表する『釈迦の本地』については、今日は詳しくご紹介できませんが、代表的なテキストの絵だけざっとご覧に入れようと思います。『釈迦の本地』諸本の物語の共通点は、冒頭に本生譚の雪山童子の話がくることです。右側で裸になつて下の鬼に向かつて飛び込もうとしているのが雪山童子で、修行していて、無常を悟る「諸行無常、

是生滅法、生滅滅已、寂滅為樂」という詩偈のうち、最後の「寂滅為樂」の句が分からないため、それを鬼が教えにくれたら命を与えようと約束し、教わるやいなや命を与えようとする瞬間を描いているわけです。しかし、ロンドンの大英博物館にある絵巻で見ると、雪山童子よりも鬼の方に焦点があつて大きく詳しく描かれていますね。これはいわゆる八面大王だと思われませんが、むしろ鬼の姿を描きたく描いているように見えます。

それから、ニューヨークのスペンサー・コレクションにあります『釈迦の本地』の絵巻は、十六世紀のもので、今残っている絵巻の中では最も古いものの一つですけれど、残念ながら下巻が欠けています。もともとは高野山の地藏院にあつたことが印記から分かります。このスペンサー本に典型的に描かれています。『釈迦の本地』の大きな特徴の一つに、太子時代の釈迦が四つの門を回つて外に出て、東の門で老人に会い、南の門で病人に会い、西の門で死者に会つて、人間の老・病・死の苦しみを知る。そして、北の門で坊さんに出会い、それがきっかけで出家するという展開で、「四門出遊」とか「四門遊観」といわれます。これを『釈迦の本地』では、お伽草子の定番である「四方四季」と結びつけています。この「四方四季」とは、異界のシンボルのようなもので、たとえば浦島太郎の竜宮城がそうですね。酒吞童子の大江山の城もそうですが、東南西北と春夏秋冬が結びついて一度にパノラマ状で目の前に現れるんですね。方角と季節が結びついてしかもそれが一度に現れるわけで、時間と空間を超えた独特の世界が現出します。それを『釈迦の本地』では、東南西北の門ごとに季節が表わされています。ただ、そうなると、東の門で春の季節に老人に出会うことになるわけで、春に老人という設定は、いかにもそぐわない感じがしますが、とにかく、四方四季と四門出遊を結びつけたのは、『釈迦の本地』の大きな特徴の一つと言つて良いと思います。

それから、太子時代の釈迦が象を投げ飛ばして生き返らせたり、ダイバダッタと相撲や弓矢などの力比べをやつて、勝つてヤシユタラという姫を得るといふ展開になりますが、これもいろいろ物語化されています。ところが、『釈

迦の本地』の大多数のテキストでは弓矢の場面しか出てきません。その一方で象投げや相撲の場面を持つテキストが二点だけあります。先のスペンサー本の絵巻とジュネーブのボドメール美術館にある絵入り本です。文章がつきはぎされたような感じで、おそらく通常の本文にこの相撲と象投げをあらたに付け加えたのであろうと考えられます。しかも画面を見ると、スペンサー本は相撲、象投げいずれもありますが、ボドメール本はダイバダツタが象を一撃で殴り殺す場面だけが絵画化されています。相撲の画面はありません。いずれにしても、ボドメール本にも相撲の本文はあるので、他本との大きな違いの一つといえます。これには、中世に作られる大画面の掛幅図の釈迦八相図には必ず象投げ、相撲、弓矢の三つが描かれていますので、これに拠った可能性が高いと思われます。おそらく絵解きされていたものをふまえているでしょう。

ついで悟りを開いた釈迦は、もう涅槃が近づいたということで、釈迦を産んで二週間で亡くなり、天上界に生まれ変わっていた母親の摩耶夫人がいる天上界に教化に行きます。母親不在は、『源氏物語』の光源氏もそうですが、物語の主人公の特徴で、おおもとは釈迦の物語にあると思います。釈迦が弟子を引き連れて天上界に行くときに、ダイバダツタら外道が妨害しようしますが、釈迦の弟子の目連が巨大な龍蛇に変化して、外道たちとバトルを展開し、撃退します。『釈迦の本地』の物語には必ず出てくる場面なのですが、その場面を描いたテキストがなかなか見つかりませんでした。そうしたら古書展の目録の図版に出いたので、びっくりしてこれはどうしても手に入れなくては、と思います。大学から予算をつけてもらって、立教大学の図書館に入りました。宇宙の中心の須弥山で、左上の方に釈迦が雲に乗って頂上をめざし、左下に外道や鬼たちが逃げるといふ対比が描かれています。釈迦達は鮮やかな雲、鬼たちは黒雲という対比もありますね。この須弥山の頂上が帝釈天（切利天）で、ここで釈迦が摩耶夫人と対面しますが、摩耶は釈迦を生んで二週間で亡くなっているので、成人した釈迦が分からない。どうするかというと、

釈迦が、「あなたが乳を飛ばしてみれば、それが口に入ったのが息子ですよ」と言うんですね。そこで、摩耶が乳を飛ばしたら、見事、釈迦の口に入るといいう、親子の証明ですね。『釈迦の本地』では、この他にも、母と子とか、釈迦と息子のラゴラの出会いとかが、親子の絆というものがテーマになっています。

ついで四国の金比羅さんにある絵巻は十七世紀半ば頃のもですが、ここに摩耶が乳を飛ばす場面が劇的に描かれています。この話は本来、仏典にあるんですけど、これをこのように絵画化しているテキストは、今のところ『釈迦の本地』しかないですね。特に女性が乳を出して飛ばしている画面は他には見ることが出来ません。立教本などではまるでホースで放水しているみたいで、テキストによつて絵がずいぶん違うことが良く分かります。

今日は残念ながらお話できませんが、この図とそっくりの図が実はキリスト教にあります。マリヤがキリストではなく、ベルナルドスという中世のフランスの聖人に乳を飛ばす絵があるんですね。このキリスト教絵画には乳を飛ばす絵はいっぱいあります。こういう話をしていると夜が更けてしまいそうですので、こちら辺でとばさざるをえませんか。

そして涅槃の場面になります。涅槃図は涅槃会とかかわり、お寺の堂内で大きな涅槃図をつるして涅槃会をやりますので、大画面の絵の印象が強いです。『釈迦の本地』の絵巻や絵本などでも涅槃は描かれています。涅槃図の一種類としても、注意する必要があると思います。中でも目を引くのは、大英博物館の絵巻です。絵巻というメディアの特徴を最大限に利用したものです。絵巻は、右から左へ巻いていきますので、絵が動いていきますね。大英博物館はその特性を利用して、涅槃の現場のかなり手前から、バツダイ河沿いに動物たちが続々と集まってくる様子を描いています。天上界からは、摩耶が釈迦に別れを告げるために雲に乗って降りてくるわけですが、ちょうど着地体制に入ったような感じで、後ろ側は河の流れが描かれていますので、ちょうど水に浮かんでいるように見え、その

動きが良く描き出されています。

涅槃の場面が変わっているのは金比羅さんの絵巻で、釈迦は荼毘にふされる時に廚子に入るんですね。普通はベッドのような台座に横たわっていますので、これは非常に特殊で、他の例を探していますけれど、今のところ見当たりません。もつと変わっているのは、筑波大学の絵入り本で、これだと沙羅双樹もなく、釈迦がただ横たわっているだけで、いろいろな人たちや動物が回りを囲んでいます。このうち、一人のお坊さんは他の絵とタッチが全然違いますので、後から付け足して描かれたもので、いたずら書きと言ってしまうかもしれませんが、このお坊さんが涅槃の現場にいたかったことを表していると思われることができます。

Ⅲ 日本の〈仏伝文学〉・近世、近代

次は近世の〈仏伝文学〉にいきます。江戸時代になると、『釈迦の本地』以上に仏伝の物語が大きく変わります。時間がないので飛ばさざるをえませんが、「二代記」のジャンルの一部と言ってよいくらい「二代」とか「二代記」という書名のつくものが多くなります。特徴としては、近世の出版文化による木版の印刷本が大半で、しかも挿絵がついているものが多いことが特徴です。

どういう点が変わってくるかと言うと、仮名草子の『釈迦八相物語』の挿絵でいえば、左手の沙羅双樹の枝に掛かっている袋状のがありますが、これは釈迦が最後に残したもので、托鉢で使う鉢と錫杖です。鉢を袋で包んでいくわけですが、後代になるとその意味が分からなくなつたようで、『釈迦八相物語』あたりから、この袋に関する説明が付け加えられるようになります。それは、摩耶夫人が天界から降りてくる際、もう間に合わないので不老不死

の薬を入れた袋を釈迦めがけて上から投げ下ろしたところ、それが沙羅双樹の木にひっかかってしまつて釈迦のもとに届かず、このため、釈迦は涅槃に入つてしまつた、という解釈になっています。

普通の涅槃図では、たしかに鉢と錫杖が描かれていて、古いものでは、十二世紀の『釈迦金棺出現図』にあり、個人的にはこの絵が一番好きで、仏教絵画の最高傑作と言つてよいものですが、摩耶夫人が降りてくると、涅槃に入つていた釈迦がやわら棺から起き上がる。するとぼあつと光がさして、化仏がたくさん飛び交い、周囲の人々が凝視するという劇的な瞬間を描いています。ここでも袋につつまれた鉢がきちんと描かれています。

幕末に作られた『釈尊御一代記図繪』も良く読まれました。明治になつても活字本で出版されますが、葛飾北斎の挿絵の影響が大きかつたでしょう。たとえば、先ほどもふれた提婆達多が一撃で象を殴り殺す場面など、独特の迫力ある筆致がみられます。この画面と共通するのは、スイスのジュネーブのポドメール美術館にある大判の絵入り本で、十七世紀初期のもので、これは変わったテキストで、『釈迦の本地』の大半は天台宗系ですが、これは浄土教系で阿弥陀が中心になつていて、ちよつと特殊です。提婆達多の服装も変わつていて、ほとんど南蛮屏風に描かれている南蛮人のような服装で、釈迦の敵、仏敵だからキリシタンに合わせた服装に描いたのかなという感じですね。ポドメール本も北斎本も提婆達多という悪の存在にかなり傾いて描かれているといえます。北斎本の方で面白いのは、地獄に墜ちた提婆達多まで描いていて、それを釈迦の弟子の目連が救済することになっています。普通、目連が救済するのは母親ですから、その変形というか応用、あるいはパロディになつているかと思ひます。

近世で何といつても大幅に変わったのは、幕末から明治にかけて流行した合巻というジャンルの本です。小型本で絵が中心で余白にびつしり文章が記される草双紙と呼ばれるもので、その代表に『釈迦八相倭文庫』という本があります。歌舞伎などとも関係が深いです。表紙の絵もすでに和風になつていて、これが近世の『釈迦八相物語』

以来から展開していく一つの帰結を示しているといえます。特に『釈迦八相物語』以降、本来は摩耶が亡くなって釈迦の養母となるのが妹の橋曇弥なのですが、ここでは姉妹関係が逆転して、二人が同時に浄飯王のもとに入内して妃の争いになります。妹の摩耶が寵愛を受けて、姉の橋曇弥は嫉妬して毒をもったり、呪詛したりします。摩耶が釈迦を生んで亡くなってしまうため、橋曇弥はようやく自分の過ちに気づいて改心して養母となる、という展開です。これが近世仏伝のおおきな特徴で、『釈迦八相倭文庫』まで引き継がれます。物語が本来の経典を離れて面白おかしく作り替えられていくということですね。『倭文庫』では、太子時代の釈迦が遊郭に通ったりして、経典にはまず出てこない内容になっています。提婆達多の乳母でそれが後の鬼子母神になるという悪女が登場したりします。日本人の感性や嗜好に見合った物語として成長していく過程がよくうかがえます。

そうした通俗的な面は明治になっても講談などに引き継がれます。おそらく近世に流行したものが明治にも継承されたでしょう。明治になると、講談の速記本が読み物にもなります。

現代では、有名な手塚治虫の『ブツダ』があつて、アニメにもなっていますね。それから、若い方は知らないと思いますが、大映という映画会社が作った大作の『釈迦』という映画がありました。ハリウッドでは、『リトル・ブツダ』という映画があつて、チベットを舞台として仏伝も出てきて、キアヌ・リーブズが釈迦を演じています。

そして、明治以降には学術書としての釈迦の伝記がたくさん出されていて、今も続いています。近代の西洋のサンスクリット語やパーリー語などの研究をもとにする仏教の原典研究の進展にともなうて、漢訳経典ではなく、もとの原典から仏伝を記述し直そうという動きや、さらにヨーロッパと日本やアジアとの往復にインドが中継地となるので、実際にインドに行つて仏跡を巡礼する人も出てきて、岡倉天心のようにインドの仏教美術を発見してひろく紹介する人も出てきます。観念的、想像的だった天竺世界が、実際に見られる、可視化されるようになるわけです。

西洋の仏伝研究の翻訳も出ますし、近世までの物語的なものが否定されるようになり、〈仏伝文学〉は近代におおきな転換を迎えます。

IV 東アジアの〈仏伝文学〉

次に東アジアに移ります。中国では漢訳の仏伝経典をもとにして、まず『釈迦譜』という書物が作られます。これは様々な仏伝経典を集めて分類し直したもので、仏伝の類書と言ってもよいかもしれません。これは非常に良く読まれており、日本でも断片的ですが、古写本が残っていますし、近世には出版されています。独自に作られたものでは、唐代の文人の王勃が書いた『釈迦如来成道記』、明代に作られた『釈氏源流』、この二つが代表的なものです。両方とも東アジアに広まっており、朝鮮本や和刻本が刊行されていますし、ベトナムにもあります。ついでに言うと、中国でもマンガの仏伝があるんですね。『釈迦牟尼』というのがそれで、日本のマンガの影響をかなり受けています。それから朝鮮半島でも、高麗時代と朝鮮時代に作られた仏伝があります。高麗時代のものは二つあり、一つは『釈迦如来十地修行記』で、これは本生譚、ジャータカを集めたものです。もう一つは『釈迦如来行蹟頌』で、詩の形で仏伝に注釈をつけたものですね。両方とも三三二八年という同じ年に作られています。高麗が蒙古の制圧下にあった時代で、仏教の力で対抗しようとしたと考えてよいと思います。

十五世紀の朝鮮王朝時代になりますと、『釈譜詳節』、『月印千江之曲』、『月印釈譜』の三つがセットとして作られます。ハングルを発明した世宗という王様が、妃が亡くなったのを悼んで息子に編纂させたものです。同時に、これはハングルの普及も意識していたんですね。『月印千江之曲』は、『釈譜詳節』に基づいて歌われた曲ですので、言っ

てみれば仏伝歌謡ですね。後白河法皇の『梁塵秘抄』と似たような関係になります。『月印釈譜』は、『月印千江之曲』を漢字・ハングル混じりで注をつけたもので、『釈譜詳節』で注釈しています。

それから『釈迦八相録』というのは、中国の『釈氏源流』を抜き出したハングル本ですね。漢文を抜き出して訓読み、ハングルに変えているうちに、内容も微妙に変わっていることが、最近の研究で分かってきています。ですから、『漢』から〈和〉へという流れが、朝鮮でもあったということですね。『釈譜詳節』は漢字・ハングル混じりですが、ハングルは古い形のもので、今の人は全部は読めないそうです。挿絵も扉のところにだけ付いていて、この絵がもとになって大きい画面の掛幅図の釈迦八相図も描かれています。韓国でもマンガ本があるのをこの七月に見つけましたので、思わず買ってしまいました。

ベトナムでは、中国で出された『釈迦如来成道記』や『釈氏源流』のベトナム版が刊行されています。ハノイに漢喃研究院という漢字やベトナムの文字の喃字(チュノム)で書かれた文献の資料センターがありますが、ここに二十世紀になって出版された『釈迦如来成道記』があります。ハノイの郊外のお寺で祈願のために寄付を募って出版され、供養されたことが巻末の刊記から分かります。

V 『釈氏源流』をめぐる

今回、一番お話ししたかったのは、『釈氏源流』という作品です。これは中国明代の十五世紀に作られたもので、仏伝と僧伝を中心にした中国仏法史ですね。壮大な作品です。一段ごとに「坐菩提樹」のように四字句の題名がついていて、冒頭には「因果経云」のように出典となった経典名があげられています。一頁に十数行の本文が書かれて

いて、それに挿絵が付いているという形態です。これが非常に良く読まれて何度も板行され、幾度も改版されています。テキストの系統は、大きく言って三つの流れがあり、最初に編集したのは、宝成という坊さんです。この段階では、絵が上で文章が下になっており、先ほど見た『絵因果経』と似たようなスタイルです。第二段階は、明の憲宗という皇帝が自ら再編する。見開きで一ページごとに文章と絵が対照できるようになり、絵が大きくなって表現力が増しています。

さらに清朝の十九世紀になると、宮廷の王子たちが改訂作業をやります。ですから、権力との深い関わりで作られているんですね。題名も『釈迦如来応化事蹟』というタイトルに変わり、絵も大幅に変わっています。この段階になると、仏伝だけになります。

普通の刊本は墨だけの墨印ですが、後から色を付けたものもいくつかありまして、たとえば、アメリカのワシントン議会議事館にあるものは、憲宗本ですが、全面に綺麗な色が付いています。これはインターネットでダウンロードできるので便利です。特に第三の系統の『釈迦如来応化事蹟』になると、絵が細かくなって集団描写が増えて、章段もより細かく分けられた部分もあります。要するに、絵をもっと表したいという志向ですね。この『応化事蹟』本も色が付いたものがありまして、ドイツのハイデルベルク民族博物館にあります。バラバラの形で二二二段分が残っています。二年前にハイデルベルクの大学で絵巻セミナーを担当した時、『熊野の本地』の絵巻があるというので、この博物館に案内してもらったら、『応化事蹟』の色つきの絵があったので非常に驚きました。嬉しかったですね。絵が非常に細かく、色も鮮やかで綺麗です。いつどこでどのように色がつけられたのか、分かりませんが、貴重なものだと思います。そして、立教の鈴木彰氏に教わったのですが、『応化事蹟』本の色付きのものが、九十年の東京古典会の目録に出ていたんですね。もう二十年以上前ですので、この本がその後どうなったかは分かりませんが、

またひよつとして出てくるかもしれません。以上のように色が付いているのは現在三点あることが分かりました。

それから、『釈氏源流』にもとづいた絵がお寺の壁画にも描かれていて、今日にも残っていて、いくつか報告されています。四川省の覺苑寺という寺にある壁画はすでに図版が出版されていますが、明らかに『釈氏源流』、おそらく憲宗本をもとにしていることが分かります。色彩も残っているので、これも貴重です。それとは別に去年、山西省の聖地の五台山に行った時、大同に千仏寺というお寺があつて、縁もゆかりもなかったのですが、土地の人が鍵を持っていて管理しており、案内してくれるというので、ついて行つたところ、本堂の本尊の裏側に絵が描かれていて、絵自体は新しいし、どうかなど思つたのですが、よく見ると「龍土讚歎」といつた四字句の表題が書いてあり、これは明らかに『釈氏源流』です。『釈氏源流』の表題をもとに絵を描いたことが分かりました。その人に会わなければ、そのお寺に行くことはなかつたので、これはまさに「仏縁」としか言いようがないと思います。『釈氏源流』の研究を始めてからそういう出会いの連続で、つくづく仏縁を感じさせられます。

やはり今年八月に西安で学会がありまして、テーマが「長安」だったので、事前に西安の南の終南山という唐代仏教の聖地を回りました。お寺がたくさんあるところ。ここでもまた『釈氏源流』が出てきたので、本当にびつくりしました。行く先々でいろいろ出てくるので、仏に導かれているとしか思えません。そのお寺は興教寺で、『西遊記』などの物語でも名高い玄奘三蔵のお墓がある寺です。通り一遍に見て、もう帰ろうかという時になつて、一番奥に臥仏殿というお堂があることが分かつて、臥仏なら涅槃ですからあわてて見に行つたら、堂の入口の高い軒下に大きい額がいくつも掛けてあつたのですが、よく見ると、さらにその奥に小さい額がいくつかが掛かつていて、表題と文章と絵があつたんです。それが、何と「双林入滅」とか書いてあるのがかろうじて読めました。それはまさに、『釈氏源流』の表題だったわけです。しかし、手前にある新しい大きな額が邪魔をして、ほんの隙間からちよっ

とだけしか見えませんでした。まさに隔靴搔痒で、手前の大きな額を外したかったですね(笑)。そうしたら、中がよく見えたでしょうから。それでも古い額が残されていただけマシかもしれません。いつのことか誰かによって作られて、このお堂に寄進され、掛けられていたことが分かりますので、『釈氏源流』の痕跡が残されていたことが分かっただけでも大変意味のあることだと思います。研究とはそういうもので、何かに関心を持って追究していると、人が気づかなかつたものを発見出来るわけですね。

また、この興教寺には、以前はなかつた新しい三蔵院という新しいお堂ができていて、これも回廊の内側の上に絵と短い文章がたくさん描かれていて、これも仏伝でした。ただ、こちらは『釈氏源流』とは関係がありませんでしたが、回廊の内側の両面と中庭の外側の三面にわたって仏伝が描かれていたんですね。これもいずれまた詳しく紹介する必要がありますと思います。

中国では、仏伝に関する本も一般向けを含めていろいろ出ていますが、それと断っていなくても『釈氏源流』を元にしたものが大変多いです。フランス語訳本や英訳本も出ています。研究書もいくつか出ていますが、美術史の方向の挿絵研究が多いですね。ハイデルベルグ大学にいる蔡穂玲という人が英語で出しているものは、かなり本格的な研究ですが、中国版と朝鮮版をもとにまとめられています。しかし、和刻本があるし、ベトナム本もあるので、まだまだ世界は広がっていくと思います。

それで次に朝鮮版を見ていきますと、宝成本も憲宗本もそれぞれ刊行されていて、後者の方が多く残っています。特に注目される伝本でいえば、宝成本の系統ですが、現在は奈良の天理図書館にあるものです。これには、見開き部分に最近、本井さんが指摘された『金藏論』というテキストからいろいろ抜き書きしています。朝鮮の漢文訓読で使われた吏読の記号がついていますので、朝鮮で書き込まれたものです。これには憲宗の序文もあります。さ

らに朝鮮版の序文があり、そこには松雲という朝鮮のお坊さんが日本にやって来た時、この本を見つけて朝鮮に持ち帰り、出版したことが書かれています。松雲は豊臣秀吉の朝鮮侵略の後の和平交渉のために日本に来たので、その時のものだということが分かります。その本が現在は天理図書館に伝わっているのも、書物の持つ数奇な運命を思わせませんが、『釈氏源流』が東アジアにまたがって行き来し、共有されていたことを示しています。

それから、ソウルの街中にある曹溪寺という大きな寺の博物館には、この『釈氏源流』の版木が残っています、印刷したものと同照的に並べられています。朝鮮でも良く読まれたことをうかがわれます。朝鮮時代には、『西域中華海東釈氏源流』という本が作られています、これは明らかに『釈氏源流』を引き継ぐ内容です。それから、先ほど出ました『八相録』も『釈氏源流』の抜粋本でハングルに翻訳されます。これらもようやく最近研究が進み出した段階です。

日本は和刻本が江戸時代の十七世紀の半ばに出版されています。ところが、これは『釈迦如来応化録』という書名になっていて、残念ながら挿絵が付いていません。挿絵付きの和刻本があるといいいのですが、今のところ見つかっていません。扉のところにだけ絵が入っています。見返しのところに偈が付いていますが、これは跡でふれます。ベトナム本も同じです。原本が共通だった可能性が高いです。一九一〇年代に出たフランス語訳本の漢字表題はやはり『釈迦如来応化録』になっていますので、この和刻本の系統だと思えます。

最近の中国の研究では、この『釈迦如来応化録』というのが挿絵付きの『釈氏源流』に先立つ一番の元であるという説が出ていますが、中国版の存在がまだ確認出来ていませので、根拠が分かりません。ただ、明らかに十七世紀に日本で出版されていますから、清朝に作られた十九世紀の『釈迦如来応化事蹟』よりもっと古いことが分かります。それ以上のことは今のところまだ良く分かりません。

そして最後にベトナムですが、これもまたいろいろな出会いがありました。ハノイの漢喃研究院に『釈氏源流』のベトナム本の複写本がありまして、見せていただいたんですが、『釈氏国音』とか、『釈氏源流演訳国音』というタイトルになっています。「演訳」とか「国音」というのは、要するにベトナム語に訓読したもので、漢字とチュノムというベトナム独自の文字の喃字をまぜたものです。日本の漢字仮名混じりと似たようなスタイルです。ただ、この喃字がなかなか読めませんが。チュノムは漢字の部首を組み合わせてあらたな文字を発明したもので、十三世紀には出来ていたようですが、国策として推奨されなかつたようで、どこまで普及したか分かりませんし、正書法として確立せずそれぞれ勝手自在に作って使われたようです。一見すると漢字のようですが、読めそうで読めない。しかし、喃字文献だけはたくさん残されていますし、詳しい喃字辞典も刊行されています。

研究院のコピー本には、「景福寺」と記されていましたので、てっきりベトナムの寺だと思い込んでいたら、なんとこれがタイのバンコックの寺であることが分かりました。この寺はベトナムの華僑の人たちが、政変とかいろいろあつてベトナムからタイに移住して、よりどころとして作られたお寺でして、そこに収められた経典類の一つだったということです。これは、東京大学の桜井由躬雄氏たちの調査団が入って調査したものの目録から知られます。特に注目されるのは、『釈氏源流』が四字句の表題ごとに詩の形式に翻訳されていることです。ベトナムでは詩の形式は、だいたい六言・八言のスタイルになり、漢字だけでなく喃字が混じります。漢字仮名交じりと同じですね。

昨年十月、ベトナムと日本が友好四十周年にあたるということで、ハノイ大学の日本学部で学会があり、それに先だってホーチミン市の社会科学学院を訪れたところ、恵光修院というお寺に漢文資料がたくさんあることを聞いて早速案内していただき、漢文資料を見せていただきました。そうしたら、中国の福建版の『応化事蹟』本がありましたが、もつと驚いたことに、それまでまったく存在を知られていなかった『釈迦如来応現図』という新たなテキスト

トが出てきたんです。これも挿絵付きのテキストで、見開きにそれぞれ絵と文がくるスタイルです。『釈氏源流』ほど大部ではありませんし、段によつて文章の量もばらつきがあります。このお寺には版を異にする本が二点ありました。

その後、十二月にハノイ大学に集中講義に行つた時に、漢喃研究院にもこのテキストが四点もあることがわかり、見せてもらいましたが、そのうち、三点はコピー本でしたので、具体的にどこのものか、本の具体的な体裁は分かりませんでした。一点だけ現物が出て、最も版が古くて刷りもよい大判でした。ベトナムで成立し、刊行された仏伝と考えてよいかと思ひます。挿絵は『釈氏源流』とまったく違いますし、文章も違います。題によつて長さも違ひ、分量も『釈氏源流』に比べたら少ないですが、非常に貴重であると思ひられます。

なかでも目を引くのがホーチミン市の恵光修院のテキストで、袋綴じの紙の折り目の柱刻のところの上に「釈氏源流」と印刷されています。全然違ひうテキストなのに、この柱のところはなぜ「釈氏源流」となつてゐるのか、謎ですね。それだけ『釈氏源流』が有名でよく読まれた、ということでしょうか、こうなつてゐるのは、この寺院の方の本だけで、他の『応現図』のテキストはそうなつていません。

それから欧米にも、先ほどあげましたように、ワシントンの議会図書館、ハイデルベルグの博物館、そしてロンドンの大英博物館にも『釈氏源流』があるんですね。一九二三年には、抜粋のフランス語訳も出ていて、五十年代にはそのリプリント本も出ています。書名は『釈迦如来応化録』となつていて、先の和刻本と同じ書名です。何にもとづいたのか、非常に気になることです。これも先にふれたハイデルベルグの色つきの本は、六十年代に既に紹介されています。

ということ、『釈氏源流』が東アジアはもとより欧米にもひろまつてゐることが分かりました。もはや中国の古

典というより、東アジアの漢字漢文文化圏共有の古典というべきでしょう。二年前に北京で『積氏源流』を読む研究会を月一回のペースで始めました。日本古典の研究者が中心ですが、若い院生達も参加しています。私は毎月、北京の人民大学に教えに通っていますので、先週もちょうど行ってきたところで、この研究会もやってきました。二年以上たつて、ほぼ半分の百段を越えたところです。まだ一通り読むには三年はかかるのではないかと思います。

VI 〈仏伝文学〉の意義

長々とお話ししてきましたが、最後に〈仏伝文学〉の意味をまとめておきますと、まず仏伝は、人間の生と死をめぐる物語の一大原点であると思います。私はいろいろなことをやっていますが、最終的には「物語とは何か」という問題を考えています。仏伝は、インドに始まってアジアからヨーロッパにまで広がっています。世界文学の観点から見ていけるわけです。

もう一つは、東アジアの漢文文化圏でも、〈仏伝文学〉は共通する面とずれる面がある。日本だけ何故あんなにストリーがどんどん変わってしまふのか。中国や朝鮮では、やはり経典の縛りというか、規範性が非常に強い、権力とつながっている。そこから逸脱してストリーを勝手に変えるなどということは、ほとんどないですね。日本だけどうしてそうなるのか、という問題があります。ただ、中国や朝鮮でも、通俗的な語りでは多分かなり自由自在に語っていたと思うんですが、そういうものは文献などになかなか残らない。文字に記録されないのでね。物語の担い手と享受層がはつきり別れていた感じがします。日本はそれがごちゃ混ぜになっているので、いくらでも変わってしまうのでしょう。そういう差があるように思います。

また、文字テキストだけでなく、口頭の語りとか歌とか、絵画や造形のイメージなどが総合的にかかわっています。メディアミックスと言いますが、表現の媒体がいろいろ複合しあつて全体象ができています。

ということで、〈仏伝文学〉は、現代においても次々と語り継がれ、また書き換えられています。研究者や、作家などの文学者その他が今もずっと作り続けているわけです。ですから、前近代のものだけでなく、現在のものも合わせて見ていくことで、分断されがちな古典と現代をつなげていけるのではないかと考えています。

最後に、一昨年、中国の甘粛省の蘭州で学会があつた時に、博物館でたまたま見て気になった涅槃像をご紹介します。これは仏弟子たちが万歳しているわけではなく、釈迦が涅槃に入った瞬間に、弟子たちが両手をあげて悲しんでいるんですね。この後、伏して拜む動作に入ろうとしている様を示しているものです。ただ、涅槃は悟りであり、一方で喜ぶべきこともあるので、あるいは万歳と解釈していいかもしれません。時間が長くなりましたが、以上です。